HCニューズレター
No.25
Human Care News Letter
2024年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

新学会体制発足から1年が経過して

第九期会長挨拶

埼玉学園大学　羽鳥 健司

本学会は、平成十一年に設立されて、今年度で二十五年目となりました。二十五年前といえば、私は大学二年生でした。そして、本学会創設時のメンバーである偉大な先生方は、当時の我が国の最前線で、各分野における世界最先端の学術研究に取り組み、その成果を教育や臨床現場に還元されていたことと存じます。そんな先生方も、これまでの経験、知恵、技術を我々後進に託し、徐々に第一線を退かれようとされております。歴史ある本学会の第九期会長に選出された身に余る光栄と、果たさなければならない責任の重さに身が引き締まる思いを抱き、一年が経過しました。

さて、第八期の三年間での各委員会の活動報告については、すでにホームページにてご報告済みですので、今回は第九期の体制が発足してから一年間の編集、学術、研修、広報の各委員会の活動報告と、第九期の残り二年間の学会運営における課題および目指す方向性についてお示しできればと存じます。

1. 編集委員会(安保委員長)、および査読にご協力いただいた先生方には、迅速で質の高い審査と掲載にご尽力いただきました。学会の顔でもある機関誌は、本学会が学術に対してどのような姿勢で向き合っているのかを如実に表します。第九期では、広報委員会と協力し、念願の機関誌オープンアクセス化を実現していただければと思います。

2. 学術委員会(小泉委員長)には、会員の先生方の研究成果を学会の内外で共有し、各分野の更なる研鑽と発展を担う重要な責任を負っていただいております。第二十四回学術集会は、遠藤大会委員長(日本赤十字看護大学)の下、第八期常任理事の先生方および関係する先生方のご尽力のおかげで、オンライン形式で開催することができました。現在、佐居次期大会委員長(聖路加国際大学)により、第二十五回大会の開催に向けて着々と準備を進めていただいております。

3. 研修委員会(大場委員長)は、学術集会に合わせて開催されております。第二十四回研修会では、第八期常任理事の長田先生の下、石村先生(東京成徳大学)をお招きし、「セルフ・コンパッションとは何か?~自分を思いやるための実践方法~」をオンライン形式で開催していただきました。大場委員長には、現在、第二十

日本ヒューマン・ケア心理学会 第九期理事一覧

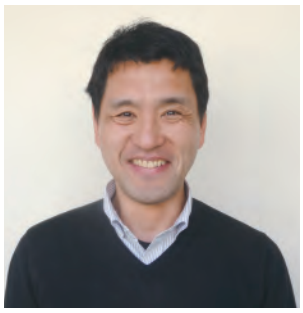
会長	＊羽鳥 健司	埼玉学園大学	
理事	＊安保 英勇	東北大学	
	＊石村 郁夫	東京成徳大学	
	磯和 壮太朗	名古屋芸術大学	
	今井田 貴裕	人間環境大学	
	雲 財 啓	京都橘大学	
	＊遠藤 公久	日本赤十字看護大学	
	#＊大場 良子	埼玉県立大学	
	＊北田 雅	京都大学	
	＊小泉 隆平	近畿大学	
	小正 浩徳	龍谷大学	
	阪無 勇士	目白大学	
	佐居 由美	聖路加国際大学	
	佐藤 修哉	長野大学	
	清水 裕子	香川大学	
	中込 さと子	信州大学	
	西嶋 雅樹	神戸女学院大学	
	原 瑞穂	香川大学	
	宮部 明美	埼玉県立大学	
	山内 朋子	日本赤十字看護大学	
監事	島井 哲志	関西福祉科学大学	
監事	中村 恵子	東北福祉大学	

以上五十音順　＊常任理事　#男女共同参画推進担当

五回の開催に向けて、会員の皆様にとって有益な研修会となるようご尽力いただいております。

4. 広報委員会(北田委員長)では、学会、学術集会、研修会のホームページの更なる充実化を目指しております。編集委員会と協力し、念願だった機関誌のオープンアクセス化を実現していただきました。また、年に一回のニューズレターを発刊しておりますので、会員の先生方におかれましては、北田委員長からのご依頼の際には、是非ともご協力いただけますと幸いです。現在も学会の内外に向けた更なる広報活動の充実を目指していただいております。

AIが急速に発展し、様々な分野に影響を与えています。本学会でも積極的に取り入れて、より全人的な対人支援について検討していく必要がありますが、その一方で、AIがヒューマン・ケアの全てに取って代わることは不可能です。ヒューマン・ケアを実践する上で必要不可欠な対人支援には、一問一答方式で正確な入力が求められるわけではなく、支援者との関係性の中で展開されていく五感を使った体験プロセスこそが最も重要だからです。人の感情体験は、個人のその場の思考や自己決定、態度、行動、健康に強い影響力を持つだけでなく、より長期的で広範囲な成長、育ち、人生の選択、幸福感にも影響を持ちます。社会の最新の情勢やニーズに応えられるよう最善を尽くすことはもちろんですが、これまで育まれ、受け継がれてきたエッセンスを忘れることなく、学会の更なる発展に向けて身を捧げて参りたいと存じます。会員の先生方におかれましては、これまでと変わらぬご指導を賜れましたら望外の喜びです。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。



日本ヒューマン・ケア心理学会
第九期会長 羽鳥健司先生

セルフ・コンパッション

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第二十四回大会を終えて

日本ヒューマン・ケア心理学会　第二十四回大会　大会委員長
日本赤十字看護大学さいたま看護学部　遠藤　公久

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、令和五年五月八日から「五類感染症」として分類されました。本学術集会もその決定から間もないこともあり、ここ数年同様にリモート形式による開催とさせていただきました。

この数年間コロナ禍にあり、私たちの生活様相は大きく変化しました。行動制限時には、行動の不自由さ、先の見えない将来への不安に、人々は多大なストレス状態に陥りました。人々の関係性やつながり感の希薄化、相互の寛容性の低下なども指摘されました。その結果か、高校生や大学生の自殺率の増加も報告されました。私たちは新しい時代を迎え、家庭、学校、社会のあらゆる場で共生するなかで、人々が自他共にいたわり、思いやることが益々求められているのではないでしょうか。

ハリファックス(Halifax,2018)は、「自分であろうと他者であろうと、その悩みや苦しみを深く理解し、そこから解放されるよう役に立とうとする純粋な思い」をコンパッション(compassion)と呼びました。そして彼女は医療や対人援助に関する際、内面や対人関係において、well-beingに導く五つの資質として、「利他性」「共感」「誠実」「敬意」「関与」を挙げています。

ヒューマン・ケアを探求する本学会において、このコンパッションは極めて重要な概念であると考えます。ヒューマン・ケアに従事する者にとって、自身の負の部分を含めた「ありのままの自分」に対してコンパッションを向ける「セルフ・コンパッション」に注目しました。自分の悩みや苦しみに対して、自分に優しい気持ちを向け、悩みや苦しみは誰しも経験するもので、無視したり過大視せずバランスよく受け入れようというとらえ方です。これは、「思いやり」「慈しみ」を援助する他者だけでなく、援助する自分自身にも向けていくことかと思います。

そこで、本学術集会のテーマを「ヒューマン・ケアにおけるセルフ・コンパッション」とし、以下のプログラムを実施いたしました。まず基調講演は、高宮有介氏(昭和大学医学部医学教育学講座客員教授)に「セルフケアできていますか?~セルフ・コンパッション、マインドフルネスを活かして」というテーマで基調講演をしていただきました。

また、シンポジウムでは「ヒューマン・ケア領域におけるセルフ・コンパッションの可能性」というテーマにいたしました。医療従事者がバーンアウトを軽減させるセルフケアとしての有効性や、患者さんがご自身の慢性疾患や精神症状を軽減させるためのセルフケアとしての有効性など、医療従事者と患者双方に対するセルフ・コンパッションの可能性について探ることにいたしました。シンポジストに



大会委員長　遠藤公久先生

は、医療社会学の領域から小児がんの家族や医療従事者に聞き取り研究を行ってきた鷹田佳典氏、精神看護学の領域から看護師のレジリエンスに関する研究を行ってきた秋山美紀氏、臨床心理学の領域からコンパッション・フォーカスト・セラピーの実践研究を行ってきた石村郁夫氏にご登壇いただきました。指定討論は基調講演者の髙宮有介氏にお願いしました。

研修会では、「セルフ・コンパッションとは何か？～自分を思いやるための実践方法～」というテーマで石村郁夫氏に講師をお願いしました。参加された会員の皆さまはいかがでしたでしょうか。

本学術集会に参加され、この新たなヒューマン・ケアとしての「セルフ・コンパッション」の全体像についてご理解いただき、実践のお役に少しでも立てていただけましたら、開催者の一人としてこれ以上の喜びはございません。

●基調講演

「セルフケアできていますか？ ～セルフ・コンパッション、マインドフルネスを活かして～」

講師　昭和大学医学部　髙宮 有介先生

第二十四回大会の基調講演は、昭和大学医学部医学教育学講座の客員教授でいらっしゃる髙宮有介先生による「セルフケアできていますか？～セルフ・コンパッション、マインドフルネスを活かして～」でした。ご講演では、セルフケア体験や事例、関連動画を通して、今を生きていること、他者とつながっていることに気づき、感謝し、喜ぶことの重要性や尊さをご教授いただきました。

日頃、ケアに従事されているみなさまは、普段どの程度ご自身をケアしていらっしゃるのでしょうか？　私は、臨床心理士として、患者様やクライエント様にはセルフケアの重要性を説く立場にあるにもかかわらず、すっかり自身のケアをなおざりにしていました。ご講演では、飛行機の緊急事態時には、親のほうが子どもより先に酸素マスクを装着するよう定められていることを例に挙げられ、ケアに従事する者が健康を維持することの重要性を示されました。自身が健康でないのに、他人をケアすることなどできないのだと、改めて実感いたしました。

また、末期を迎えられる人々の手記、ご遺族のメッセージを、多数ご紹介いただきました。そこでは、人々が死に瀕して再認識した、近しい者への愛や感謝、生やいのちの尊さ、一瞬間を大切に過ごすことについて語られた生の言葉を拝聴いたしました。髙宮先生が語られる人々の言葉に、心が大きく揺さぶられました。私は、他者との関係を、自他の生やいのちを、ここまで大切にしたことがあったかと自問自答させられました。私たちは、何と尊いものを抱えて生きているのでしょうか。そのことにはたと気づくと、仄暗くカサカサした心に光と潤いが戻り、何とも生き還ったような心持ちになりました。これが、私たち人間が目指すべき健康の一端であるのだと、実感した次第です。

さらに髙宮先生は、今を生きていること、他者とつながっていることに気づき、感謝し、喜ぶことといった、健康の定義やそれを維持・増進させる方法について、あらゆる手段で語られました。私は、それこそがヒューマン・ケアの神髄であると感じました。患者様やクライアント様に最善のケアを提供できるよう、まずは自分自身にケアとコンパッションを向けたいと決意しました。

素晴らしいご講演をお聞かせくださった髙宮先生、ならびに、このご講演を拝聴する機会と、本稿の執筆・投稿の機会を設けてくださった事務局様、その他関係各所の皆々様へ、心よりお礼申し上げます。

（甲南大学大学院人文科学研究科　中谷智美）



髙宮有介先生

●大会企画シンポジウム

「ヒューマン・ケア領域における セルフ・コンパッションの可能性」

シンポジスト　鷹田 佳典先生　日本赤十字看護大学 さいたま看護学部・准教授

秋山 美紀先生　埼玉県立大学 保健医療福祉学部・教授

石村 郁夫先生　東京成徳大学 応用心理学部・准教授

指定発言　髙宮 有介先生　昭和大学医学部 医学教育学講座・客員教授

座　長　中込さと子先生　信州大学医学部・教授

遠藤 公久先生　日本赤十字看護大学 さいたま看護学部・教授

セルフ・コンパッションについての知識が不足しておりましたが、今回のシンポジウムによって、基本的な概念を知ることができました。さらに、医療従事者と患者双方にとってよりよいケアの可能性が広がることを理解することができました。鷹田先生のご発表では、言語的観点や哲学的観点を含め概念からご説明いただきました。そして、先生のご経験をもとに、コロナによるモラルインジャリー（道徳的負傷）のご説明と医療者のセルフ・コンパッションへの問いをご提示いただきました。秋山先生には精神看護学の視点から看護職のセルフ・コンパッションについてご紹介いただきました。コンパッションとは、自身や他者の苦しみを敏感に感じ取り、それを和らげるよう心を尽くすことであり、患者の痛みを理解することと医療従事者自身の痛みは同一ではないことが印象的でした。看護職へのセルフ・コンパッション研修では、科学的な説明を行ったうえで、他者に慈愛の心を向けるように自身を労ることで、自己犠牲の機会を減らすことがわかりました。石村先生には臨床心理学的な観点からご説明いただきました。心理職を目指しているため、「よくある質問」やセラピストがコンパッションを取り入れる意義など大変勉強になりました。さらに、髙宮先生の指定発言や公開討論での補足

説明、先生方それぞれの専門の観点からディスカッションによって、多角的な知見を得ることができました。

今回、先生方にさまざまな視点からご講演をいただき、セルフ・コンパッションについての理解が深まるとともに、今後の展開を考える機会となりました。コロナによって医療従事者のモラルインジャリーやバーンアウトへの注目が高まっています。患者だけでなく働く人々を癒すためにも、セルフ・コンパッションの有効性を広めることは人々が健やかに生活するうえで必要なことだと感じました。私自身、セルフケアの可能性を研究の目的の一つに掲げて邁進したいと思います。貴重な学びの機会をありがとうございました。

（東北大学大学院教育学研究科臨床心理学コース
博士課程前期一年　小林 冴）



大会企画 シンポジウムの様子
（左から順に 遠藤公久先生、石村郁夫先生、秋山美紀先生、鷹田佳典先生）

●研修会

「セルフ・コンパッションとは何か？ ～自分を思いやるための実践方法～」

講師　東京成徳大学 応用心理学部・准教授　石村 郁夫先生



石村郁夫先生

本研修会では東京成徳大学応用心理学部の石村郁夫先生より、セルフ・コンパッションの定義やコンパッションが必要な理由について、コンパッションの恐れについて、コンパッションに基づく支援について講演していただきました。初めに実施したチェックインエクササイズでは、マインドフルネスを取り入れた心地よいリズムの呼吸を行ったり、コンパッションに満ちた理想の他者を思い浮かべたりすることで、実際に自分の中にコンパッションが芽生えてくる感覚を体験することができました。またこの体験によって、セルフ・コンパッションにおける理解が知識だけでなく感覚として深まったと感じています。研修会の前半では、セルフ・コンパッションが必要な理由について話を伺いました。人間の脳は動物とは異なり、一度上がった感情レベルは下がりづらいため、反省や未来の予測を行い自己批判に向かってしまうそうです。そのため自分自身をサポートする思考を与え、実際の助けとなる結果を想像して慈悲の心を向けることが重要であると知ることができました。研修会の後半では、最近の研究から明らかになっているコンパッションの恐れについて話を伺いました。誰もがコンパッションを容易に受け入れることができるかと言うとそうでもなく、中には自分にコンパッションが向けられるとネガティブな体験が生起する人もいることが分かりました。またその背景においては、コンパッションへの恐れは過去の養育環境が関係し、不安型や回避型の愛着スタイルが活性化することで恐れが高まるという機序を学ぶことができました。最後はコンパッションに基づきどのような支援をしていけばよいかについて話を伺いました。私が印象的だったのはコンパッションに基づいた心理療法が目指すものについてです。コンパッションはただ我々支援者からクライエントへ向けられるものだけではありません。我々自身もスーパービジョンを通して人からコンパッションを受け取ります。またそのコンパッションを自ら自分自身に向けてあげることもできます。このようなコンパッションの流れがクライエントに繋がり、コンパッションが溢れる社会が築かれることになります。以上の研修会を通して、自分に思いやりを向けるのは容易いことではありませんが、人から人へコンパッションの橋渡しができるような支援者を目指すべく研鑽していきたいと思いました。

（浜児童相談所　星　裕人）

学会論文賞

「学会論文賞を受賞して」

東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター助教　宇野あかり

この度は学会論文賞を授与して頂き、大変光栄に思います。調査に協力して下さった看護師の皆様、熱心にご指導くださった東北大学大学院教育学研究科の安保英勇准教授、この研究に関わってくださった方々にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。

今回、受賞対象となった「緩和ケア病棟での経験が浅い看護師の心理過程」は、緩和ケア病棟勤務が三年半未満の看護師が、どのように日々の緩和ケアの実践を継続しているのかを、「死のとらえ方」と「時間的展望」という二つの観点から明らかにしました。時間的展望（Time perspectives）とはその人自身が、過去、現在、未来をどのようにとらえているのかを示す概念であり、人生の見通しと言い換えることができます。本研究の結果から、

経験の浅い看護師は、緩和ケアの中で答えのない問題に直面することで困難を感じていました。しかし、そのような状況下において死のとらえ方や時間的展望を変化させることで緩和ケア病棟の中で働くことの意味を見出し、その意味づけが日々の実践を支える原動力となっていました。本論文では自分なりの視点から、現場の看護師の方々が奮闘しながらケアにあたる姿を、読者にも伝わりやすいように描き出すことを意識して執筆いたしました。今後の課題も残っているため、それらを引き続き検討し、研究としての意義をより高めていきたいと思います。

また、私事ではございますが、令和五年十月から東北大学スマート・エイジング学際重点研究センターに着任いたしました。教員として新たなキャリアがスタートし、今後はスマート・エイジングに関する研究テーマを中心に取り組んでいく予定です。新しい分野に足を踏み入れることで、自分自身の視野をより一層広げ、より多角的に死に寄り添う人々の支援に繋がる活動を続けたいと思います。今回の受賞を励みにしつつ、ライフワークとしてこの分野の発展に尽力できるよう精進して参ります。



優秀発表賞　ポスター発表部門（若手）

「優秀発表賞を受賞して」

奈良女子大学大学院
人間文化総合科学研究科博士後期課程
生活環境科学専攻心身健康学講座一回生
花弥　一葉

この度は、優秀発表賞をいただきまして、とても光栄に感じております。審査していただきました先生方には厚く御礼申し上げます。また、連名発表者であり、いつも多大なご指導を頂いております伊藤美奈子先生、同じく連名発表者であります感覚過敏研究所の加藤路瑛さま、尺度項目収集にご協力いただきました大学院生の方々、そして、実際に調査にご協力いただいた調査協力者の皆さまには心から感謝いたします。

私の研究では、感覚処理の特異さを持つ人々、特に感覚過敏者の心理に着目し、感覚過敏者の心理・適応面のアセスメントから、感覚過敏者個々人に合わせた支援を考えることをテーマとしております。今回の発表ではこれに関連して、感覚過敏の自己記入式の心理尺度である「感覚過敏尺度」の開発について発表させていただきました。

私が今回の発表の研究を始めたきっかけは、ご自身も感覚過敏の当事者である連名発表者加藤さまから、当事者が使いやすいアセスメントツールがあればとの声を頂いたことでした。それから感覚過敏者を対象に自由記述調査を行い、感覚過敏による困難に関する訴えを集めました。「感覚過敏尺度」は、そのような貴重な当事者の生のデータを元に、感覚過敏による困難をどの程度感じるか、という視点で感覚過敏を測定する尺度として作成しました。また、視覚・聴覚など、どの感覚の過敏性が高いかを分けて測定できる尺度としました。当事者のデータから尺度を開発したことにより、内容面でも当事者に寄り添った尺度となり、とても意義のある研究になったと考えております。将来的には、調査研究などでの使用だけでなく、感覚過敏者本人が、自身の困難さの把握などに活用できる尺度となればと思います。

二〇一三年に改訂されたDSM-5における自閉症スペクトラム症の診断基準において、感覚処理の特異さが挙げられるなど、近年、感覚過敏への注目が高まっていると考えられます。感覚過敏への注目を追い風とし、今後も、感覚過敏者の理解や支援に繋がる研究を続けていければと考えております。

優秀発表賞　ポスター発表部門（一般）

「優秀発表賞を受賞して」

埼玉学園大学
羽鳥　健司

この度は、第二十四回学術集会優秀発表賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。本研究の実施に当たりご協力、ご指導いただきました患者の皆様、病院関係者の方々、先生方に厚く御礼申し上げます。

はじめに、本研究の対象である炎症性腸疾患（ＩＢＤ）について簡単にご紹介させていただきます。ＩＢＤとは、消化器系に炎症を引き起こす原因不明の慢性疾患であり、狭義にはクローン病（ＣＤ）と潰瘍性大腸炎（ＵＣ）の二疾患を指します。相違点は、ＵＣが主に大腸に炎症を起こすのに対して、ＣＤは口から肛門まで炎症が広がります。どちらも我が国の指定難病であり、ＣＤ患者は約四万人、ＵＣ患者は約二十二万人います。再燃と寛解を繰り返し、生命予後は比較的良好であるものの、長期間の炎症はがん、手術、人工肛門等のリスクを高め、結果としてＱＯＬを損ねることがあるため、寛解を維持することが重要な課題の一つです。

寛解維持を支援するための第一選択は、内科的および外科的治療です。しかし、当然のことながら、これらの治療は起きている炎症を医学的に直接抑えるものであり、発症や再燃のリスク要因の一つであると考えられている食生活や心理的ストレスの改善に対しては効果が見込めません。海外では、米国を中心に、ＩＢＤ患者への心理学的支援研究が行われておりますが、ターゲットは抑うつや不安の低減を目指すものであり、食生活の管理やストレスマネジメントのような健康心理学的な視点から研究が行われているものはほとんど見当たりません。また、同じＩＢＤであってもＣＤとＵＣでは、寛解時の患者が日常で体験している困り事には差異があるものと想定されるにも関わらず、ほとんど全ての心理学的な先行研究は、ＣＤとＵＣを一緒くたにして分析対象としています。そこで本研究では、ＣＤとＵＣを分けて、それぞれの健康心理学的な支援法の開発を目指し、まずはＵＣ患者が日常で知覚している困り事とその対処法を網羅的に把握することを目的としました。本研究を手掛かりとして、支援モデル構築や支援マニュアルを作成し、患者の皆様に少しでも貢献できる日が来れば望外の喜びです。

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
第25回大会・研修会のお知らせ

学術集会テーマ…「育むヒューマン・ケア」

プログラム（一部紹介）

・基調講演（ライブ配信のみ）
「ヒューマン・ケアにおける専門家養成の光と影」
講師：岩宮恵子氏（島根大学人間科学部教授）

・特別講演
「ケア提供者によるDisrespect&Abuseの予防と改善のために」
講師：堀内成子氏（聖路加国際大学学長）

・シンポジウム①「アスベスト被害者の心を支える多職種ヒューマン・ケア」

・シンポジウム②「ヒューマン・ケアを育てる教育」

・ワークショップ「Z世代の人材育成 看護学導入期における特徴と教育上の工夫」

・研修会
「働くひとの心理学～働くとは、働くことの意味、よりよい仕事との関わり～」
講師：岡田昌毅氏（筑波大学人間系教授）
日時：2024年7月27日（土）13：00～15：00
方法：ZOOM（ライブ配信）
お問い合わせ先：2024hc.kensyu@gmail.com
研修会担当（大場良子）

今後のスケージュール
1. 演題申し込み　2024年3月1日～5月1日
2. 抄録原稿提出　2024年3月1日～5月10日
3. 参加申し込み　2024年4月22日～8月9日

第二十五回　大会準備委員会
大会長　佐居　由美（聖路加国際大学）
副大会長　長松　康子（聖路加国際大学）
大会事務局
〒104-0044　東京都中央区明石町10-1
聖路加国際大学本館4階14研究室（佐居由美研究室）
メールアドレス：jhc25-office@slcn.ac.jp
詳細は学会HPをご参照ください

編集委員会より

機関誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。執筆要項・編集規程は学会のホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。ご不明な点などは左記機関誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文（2000-2022）のPDFが学会Webサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ID:HC2024　パスワード:e6JBWM5G

（Web担当　北田　雅）

編集後記

新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行し、ようやく通常の日常生活に近づいたかと思った矢先、心が痛む出来事が連続で起きてしまいました。被災された方々、ならびにご家族・ご遺族の皆様に心よりお見舞い申し上げます。同時に、皆様の安全と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

一方、連日取り上げられている報道では、同業他社スタッフや地元企業、近隣の方々の相互協力による心温まるエピソードが伝えられ、人間同士の交流の重要性を象徴しているように感じております。研究や臨床の実践を通じ、一人でも多くの人々の心理的支援に貢献できるよう気を引き締めてまいりたいと思います。

次回第二十五回学術集会は、左居由美先生のもとオンデマンドおよびライブ配信形式にて開催されます。より多くの会員の先生方、大学院生の方々のご参加を期待しております。また、いつの日か、学会員の皆様と対面でお目にかかることを楽しみにしております。

（広報担当　北田　雅）

学会事務局および機関誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-0012　東京都渋谷区広尾4-1-3
日本赤十字看護大学内
Tel & Fax: 03-5948-4478　E-mail: office@j-hc.jp

●機関誌編集事務局
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科　安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax:　022-795-6149　E-mail: jhcs@tohoku.ac.jp